

学びと育ちを豊かにつなぐ ～「人間としての学び合い」へのまなざし～

このリーフレットは、幼稚園、保育園、認定こども園等の就学前施設が子どもたちの力を育むためにどのようなことに取り組み、そこで子どもたちがどのような力を身につけているのかをあらためて確認すると共に、小学校の先生方がそれを理解する助けとなるよう、幼保小連携推進委員会に参加した国立市内の幼稚園・保育園の先生方が中心となり、小学校の先生方・学識経験者のご協力のもと作成したものです。

このリーフレットが幼保小の相互理解の助けとなり、就学前教育から小学校教育への架け橋となることで、子どもたちの育ちが豊かにつながっていくよう強く願います。



「人間を大切にする」まちと学び合い

国立市は「人間を大切にする」まちです。すべての人々が孤立することなく、支え合い、共に生きる「ソーシャル・インクルージョン」の社会を目指しています。そのような社会の中心には、一人ひとりの多様な「人間を大切にする」学び合いがあります。

そもそも「学び合うこと」は最も「人間らしい」営みです。「学び合い」を通して私たちは、①この世界がどうなっているのかを知り、②どうしたら人と幸せに生きられるのかを知り、③自分自身の人生をよりよくしていくことができます。

このような「学び合い」は誕生直後から始まり、生涯にわたって続きます。そこにはただひとつの正解はありません。生きている限り、私たちは、この世界がどうなっているのか、どうしたら人と幸せに生きられるのか、自分はどう生きるべきなのか、それをどこまでも問い続け、学び続けています。

そうした「人間としての学び合い」を人生のあらゆる段階で豊かに経験できる環境を整えていくことは、一人ひとりの子どもが安心して学べる環境づくりにつながるだけでなく、多様な人々が支え合い、学び合える環境を実現することによって、誰もが幸せに生きられる社会をつくることへとつながっていきます。

「人間としての学び合い」があらゆる時・場所で豊かに展開される環境を実現するために家庭・園・学校・地域がつながり、ともに支え合えるように、このリーフレットを作成しました。これをご活用いただき、さまざまな場面で学び合いが生まれることを願っています。

乳児期からの生活と遊びを通した学びと育ち

1. 乳児期からの生活と遊びを通した「人間としての学び合い」 ～環境を通して世界・仲間とつながり、自分をつくる～

【安心と夢中】乳幼児期の学び合いは環境を通して行われます。ポイントは「安心」と「夢中」。一人ひとりの子どもがどれだけ「安心」してその場にいられるか、学びの対象にどれだけ「夢中」になって関わりを深めていけるか、それが学びの質を決めます。これはすべての学びの段階に共通する大事なポイントです。

【安心から興味・関心へ】泣くことは乳児の最初の表現です。この最初の表現に温かく応答されることで子どもは安心し、心地よさを求めながら自己の生命のリズムと文化的な生活のリズムを次第に同調させていきます。その安心と心地よさを土台にして、環境に自分から関わろうとする興味・関心が芽生え、出会いの対象に応じて「ヒトとの関わり」と「モノとの関わり」に分化し広がっていきます。

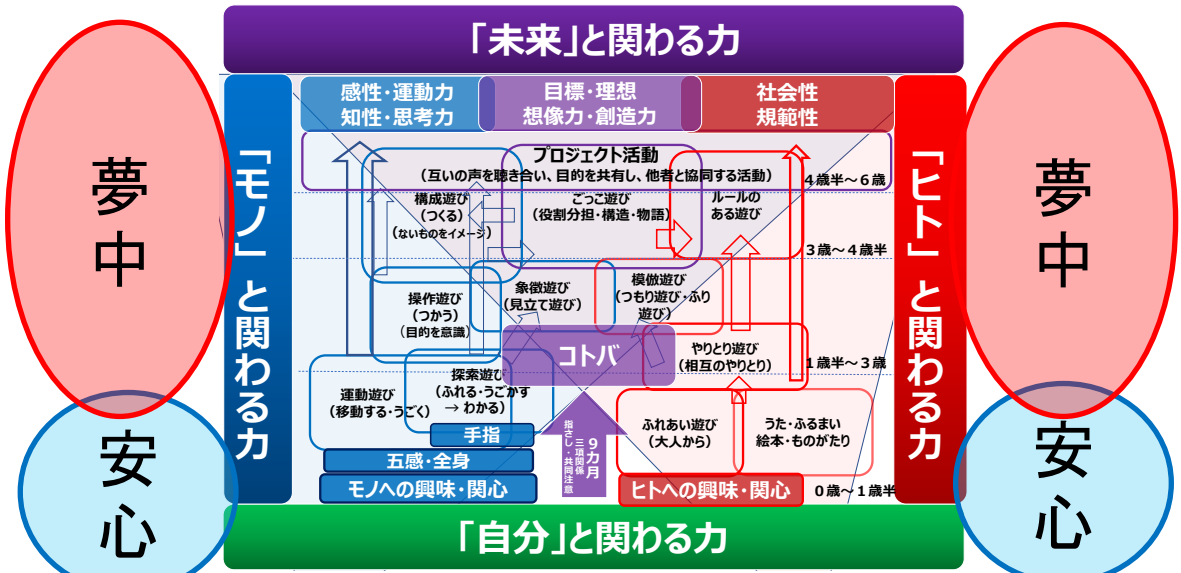


図1：乳児期からの生活と遊びを通した学びと育ち

【関わりへの広がりや深まり】「ヒトとの関わり」は間に文化をはさみます。そのため、最初は大人が主導しますが、次第に双方向のやりとりへと発展し、やがてルールのある遊びへと発展していきます。一方、「モノとの関わり」を主導するのは子ども自身です。五感で捉えた対象を探索・探究するなかで、様々な知覚と運動の機能が分化し、知性と感性、思考力と運動力が一体的に育まれていきます。

【三項関係の成立と言語の発達】「ヒトとの関わり」と「モノとの関わり」は9ヶ月頃に重なります。1つのモノをめぐって他のヒトとコミュニケーションする三項関係が成立し、指さしや共同注意が現れるのです。この三項関係の枠組みの中で「コトバ」が発達し、見立て・つもり遊びが現れ、やがてイメージを共有するごっこ遊びや構成遊び、ルールのある遊びへと展開していきます。

【民主的な社会を実現する力の育ち】
言葉の力がさらに伸びると、未来のイメージを他者と共有できるようになり、それを自分たちで実現しようとするプロジェクト活動が豊かに展開されます。互いの考えを聴き合い、みんなの幸せをつくるこの力はまさに民主的な社会を実現する力です。その重要な力が0歳からの生活と遊びを通してこのように力強く育っているのです。

「架け橋期」に学びと育ちを豊かにつなぐ

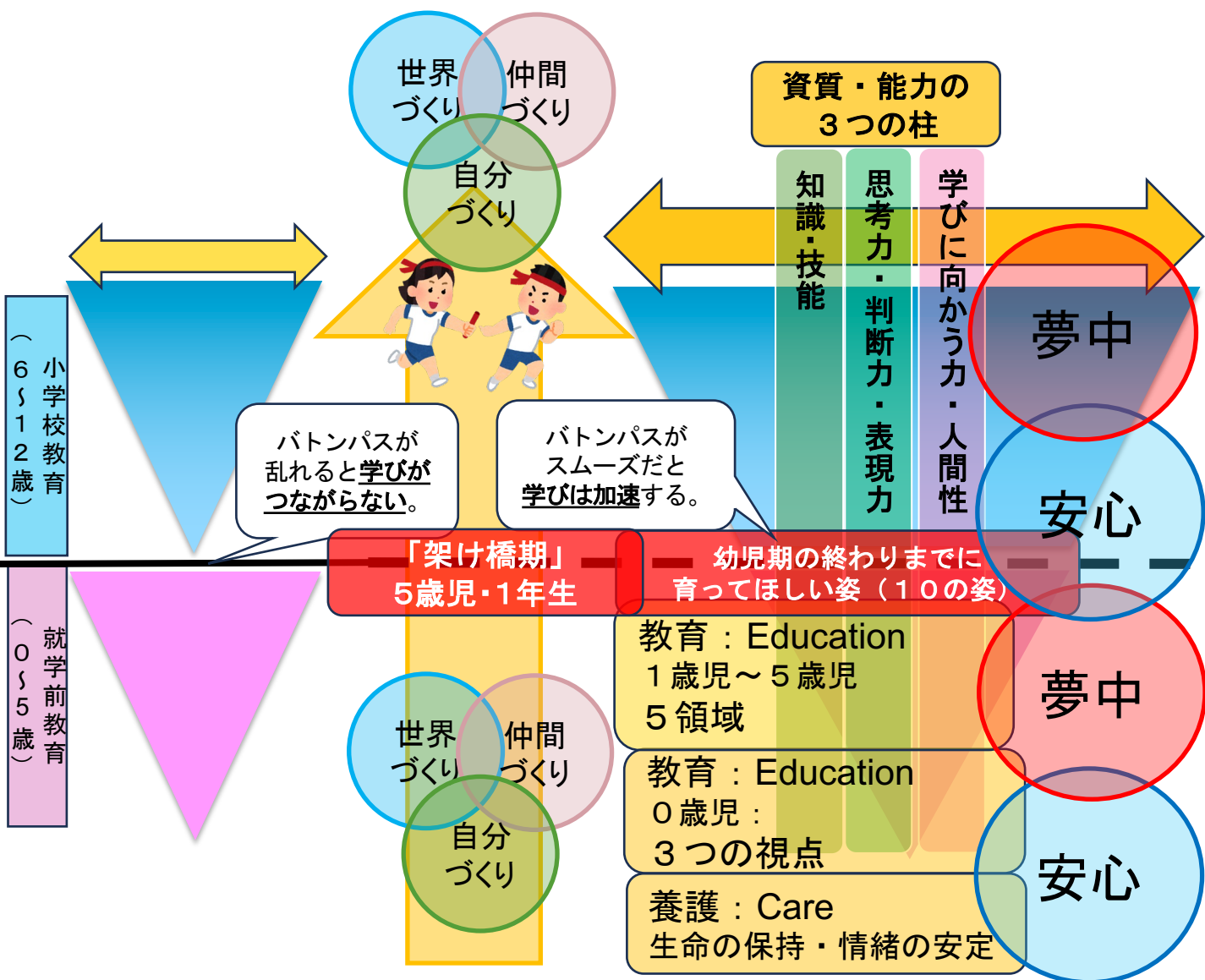


図2：学びと育ちのつながりを支える「安心と夢中」と「3つの関係づくり」

就学前教育と小学校教育をつなぐ「架け橋期」については「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「資質・能力の3つの柱」をベースにしながら、それぞれが同じ方向を向いて走りながらバトンをつなげられるような工夫が求められています。そのために大事なのが、子どものあらゆる段階の学びと育ちを支える環境や関わりです。ポイントは「安心と夢中」そして「3つの関係づくり」を意識して子どもの学びと育ちを支える環境を切れ目なく整えていくことです。

「安心と夢中」は、就学前教育では「養護と教育の一体性」として常に大事にされています。また「自分づくり/世界づくり/仲間づくり」の「3つの関係づくり」は、乳児保育の「3つの視点」やそれを展開した幼児教育の「5領域」に対応しています。これらを就学前教育だけでなく、小学校教育でも意識しながら子どもの学びと育ちを支える環境や関わりを丁寧につなぐことができれば、幼保小が円滑に接続され、資質・能力の育ちが豊かにつながり、学びの質が高まるでしょう。

図2の左側は、就学前教育と小学校教育の間で環境や関わりが切れてしまった場合のイメージです。この場合、就学前教育の成果が生かされないまま小学校教育がスタートするため、結果的に小学校での学びの幅は狭く、深さも浅くなっています。一方、図2の右側は、就学前教育から小学校教育にかけて子どもの「安心と夢中」と「3つの関係づくり」が連続的に保障された場合のイメージです。この場合、子どもたちの学びと育ちは切れ目なくつながり、就学前教育の成果を生かしつつ小学校教育がスタートできるため、学びは加速し、結果的に小学校での学びの幅は広く、深さも深くなっています。

学びと育ちを支える「3つの関係づくり」

この世界に生まれて以来、人間は生涯にわたって学び続けています。そのような「人間としての学び」を支える環境や関わりをつなぎつつ、発達に応じて展開していくことが、幼保小の段階を超えて、子どもの学びと育ちをつないでいくことになります。そうした「人間としての学び」の中心には、一貫して3つの関係づくりがあります。

- ①この世界がどうなっているのかを知り、よりよい世界をつくろうとする「世界づくり」
- ②どうしたら人と幸せに生きられるのかを知り、よりよい関係をつくろうとする「仲間づくり」
- ③自分のことを知り、よりよい自分と人生をつくろうとする「自分づくり」

この3つの関係づくりは、バラバラに進行するのではなく、相互に関連しながら広がり深まっていきます。そのつながりを理解し丁寧に支えることが、子どもの「人間としての学び合い」を促進する環境づくりや関わりのベースになります。

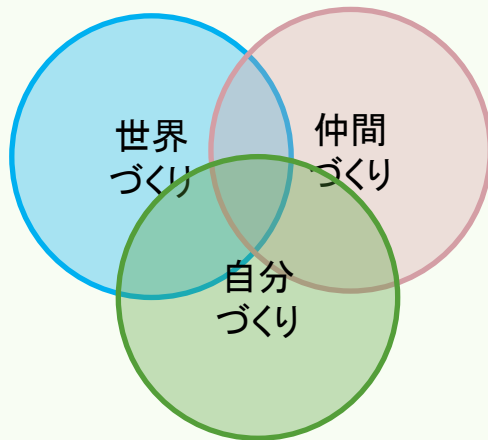


図3：「自分づくり」と「仲間づくり」と「世界づくり」が相互に関連しながら展開される「人間としての学び合い」

「世界づくり」

子どもは身近な世界の多様な対象に興味をもち、それで遊びながら、様々なことに気づき、世界の認識をつくっています。ある対象の性質に気づくと、それを様々な場面で使えるようになります。それは自分の能力を広げることであります。そのため、世界づくりと自分づくりはともに関連しながら進んでいきます。

「仲間づくり」

子どもは世界を探究しつつ、その過程で友だちや保育者など他者の見方・考え方に触れ、自分の見方・考え方を広げていきます。他者は世界をともに探究し学び合う仲間なのです。このように、仲間づくりと自分づくりもともに関連しながら進んでいきます。

「自分づくり」

世界と出会い、仲間と出会いながら、子どもは自分で自分をつくっています。この自分づくりの過程で、子どもは今より素敵な未来の自分をイメージしながら、世界・仲間・自分との関係を絶えず編み直しています。このように、世界づくり・仲間づくり・自分づくりは相互に関連しながら進んでいくのです。

(※次頁以降の事例の背景の色は3つの関係づくり：青＝世界づくり、赤＝仲間づくり、緑＝自分づくりに対応しています。)

「5歳見らしい学びの姿」を支える「3つの関係づくり」

(※各事例の背景色は、青＝世界づくり、赤＝仲間づくり、緑＝自分づくりに対応しています。)

事例1：「学び合えるクラス」の育ち

保育園 5歳児クラス 11月

【背景】話し合いを通して、互いの考えから学び合うこと軸に保育をしています。しかし、4歳児の春には人の話を聴くこともまだ難しい状態からのスタートでした。「集まろうね」と声をかけても、3名くらいしか集まらず、早く集まった子から楽しい遊びをして待っているようにしました。すると、その楽しさを期待して徐々に早く集まるようになってきました。その姿を認めつつ、さらに話し合いを続けているうちに、話し合い自体の楽しさに気づき、それを期待して集まるように変化してきました。

5歳児になると、自分が発言するだけでなく、友だちの発言を聴いて、自分が経験していないことも想像できるようになってきます。そこで、話し合いを通して互いのイメージを共有し、役割分担しながら協力してそのイメージを実現していく経験をさせることで協同性や伝え合う力を育てたいと考え、週末に行われた市内の最大のお祭り「天下市」でのそれぞれの経験を話し合うことにしました。

互いの顔が見えるように輪になって座り、お祭りでの経験を話し合い、その内容を共有できるよう保育者が大きな紙に言葉や絵で描いていきました。お祭りに行けなかったさとしやけんじも、みんなの話聞いてるうちにイメージが膨らんできたようです。



さとし：「僕は行ってないけど、みんなの話聞いて楽しそうだなと思った！」

けんじ：「僕も行きたかったなあ・・・。」

担任：「じゃあ、自分たちで「おまつり」をつくってみるのはどうかな？」

みちこ：「ひまわり組の天下市」だね！

たかし：「ダンボール箱で、おみこしもつくろうよ。」

さちこ：「『ひまわり組の天下市へようこそ』っていう看板もあったほうがいいね。」

けいこ：「ひまわり組だけじゃなくて、他のクラスの子も呼んでお客さんになってもらおうよ！」

かんだ：「でも、描いたことを全部いっぺんにはできないよ。順番にやらなくちゃ。」

ゆうき：「部屋だけじゃなくて外も使ってやれば、いいんじゃない？」

担任：「色々なアイデアが出てきたね。」

では、どんなお店を出したいか、どんなふうにやりたいか、みんなで決めていきましょう。」

事例2：体験を通して「協力」の意味を学ぶ

保育園 5歳児クラス 7月

【背景】子どもの主体性に基づいた「考える力」や「感じる心」を伸ばすため、子ども自身が自己選択・自己決定できるような環境を通して、その育ちを支えています。物的環境としては子どもが主体的に「遊び込める空間」を整え、人的環境としては子どもの主体性を奪う「指示語・命令語・禁止語・否定語」を使わずに「子どもと相談し対話する保育」に取り組んでいます。

夏に星を見た経験から、星空に興味をもった子どもたち。部屋の中に「プラネタリウム」をつくるための話し合いをすることになりました。

まず、輪になって必要なものを話し合い、各グループで担当することを決めました。それから、小グループに分かれ、一人ひとりが自分のアイデアを絵や文字で表現した「自分の企画書」をつくって仲間に説明しました。アイデアを聞き合った後、それぞれの考えのよいところを取り入れた「みんなの企画書」をつくり、それをもとにグループで作業を進めました。同じ作業をみんなでするよりも役割分担した方がよいのですが、具体的にどうしたらよいかかわからないようです。同じことができない仲間を責める姿も見られました。そこで、「一人ひとりの得意なことを生かしてみたら」と提案したところ、絵が得意な子は絵を描き、切るのが得意な子は切るという役割分担が生まれました。



自分の得意なことを任せられた子どもたちは見違えるように意欲的に取り組み、仲間のよさを認めたり、教え合ったりする姿も見られるようになりました。こうした取り組みを進める中で、子どもたちは「協力」ということの意味を体感し、他の場面でも協力する姿が見られるようになっていきました。

事例3：文字がつなぐ「自分」と「世界」

幼稚園 5歳児クラス1月

【背景】毎週末の絵本の貸出日。5歳児は借りたい本を自分で選んで持って来ます。保育者は子どもの目の前で「絵本カード」に氏名と題名を書きます。そうした活動をしばらく続けているうちに、自分で書きたい気持ちが膨らんでいきます。その気持ちを受け止め、5歳児の後半には、自分で書きたい子どもから絵本カードに文字を書くことを始めます。

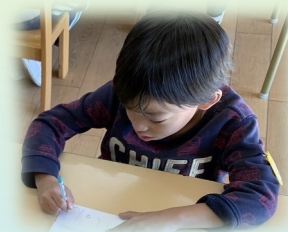
もときは朝から決めていました。今日は先生がみんなに読んでくれたあの本を借りようと。そこで、絵本の貸出の時間になると迷わず『ももいろのきりん』を選び、いつものように「書いて」と言いながら保育者に絵本とカードを差し出してきました。

保育者：「『あさだもとき』くんね。あっ！『ももいろのきりん』の『も』と『もとき』くんの『も』って同じだね！」

もとき：「もときの『も』が2こもある！」とうれしそうに言いました。

保育者：「じゃあ、『も』っていう字と一緒に書いてみる？」

もとき：「うん。書いてみる！」とやる気になって言いました。



保育者が絵本カードに「あさだ」まで書くと、それに続けてもときが「も」を書きました。

保育者：「もときくんの『も』が書けたね。その後の『と』と『き』は誰が書く？」

もとき：「先生が書いて」

保育者：「わかった。もときくんの『と』と『き』を書くね」

書き上げた絵本カードの名前を「あ・さ・だ・も・と・き」と声に出して読むと、

もとき：「もときが書いた」ととてもうれしそうな様子です。

もときは自分の名前の中の「も」の字を自分で書いたその日を境として、文字を書くことに意欲的になり、「も」以外の文字も自分から書こうとするようになっていきました。

【「5歳児らしい学びの姿」の3つの事例に共通するポイント】

① 学びのテーマや方法を選ぶ際には、子どもたち一人ひとりが自分から意欲をもって環境との関わりを深めていけるような「主体的（個別最適）」な学びの姿が大事にされています。

② 個々の子どもを孤立させず、仲間とテーマを共有し、コミュニケーションをとりながら学びを深めていけるような「対話的（協働的）」な学びの姿が大事にされています。

③ 抽象的な言葉だけで学ぶのではなく、具体的な経験を通して学びの成果を実感し、他のことにも自然に広げていけるような「深い」学びの姿が大事にされています。

就学前教育は「環境を通じた教育」と言われますが、そこではこのように小学校以上の学習指導要領でも大切にされている「主体的、対話的で、深い学び」や「個別最適な学びと協働的な学び」が実現されています。また、そうした学びに「夢中」になる姿が、みんなに受け入れられているという「安心感」に支えられていることも共通しています。それぞれの事例ごとのポイントも確認しておきましょう。

【事例1】話し合いの楽しさを実感していく過程を丁寧に支えることで「学びに向かう力」を粘り強く育てています。互いの顔が見えるように座り、発言を絵や文字で可視化し、お祭りづくりへと展開することで「世界づくり/仲間づくり/自分づくり」が一体的に深まる工夫がなされています。

【事例2】自分のアイデアを可視化する「自分の企画書」を書いた上で、安心できる小グループで互いのアイデアを聴き合って「みんなの企画書」へと高め、それに基づいてプラネタリウムづくりをすることで「世界づくり/仲間づくり/自分づくり」が一体的に深まる工夫がなされています。

【事例3】文字への興味・関心も「読める/書ける」という技能の獲得ではなく、文字によって開かれる世界に触れた感動を豊かに経験することが大事にされています。好きな本と自分の名前に同じ文字を発見した感動が文字を「書きたい」という意欲につながっていく過程を保育者が丁寧に支えています。

事例4：「学び合う力」は小学校につながる

(1年生算数：「長さをくらべてみよう」)

小学校1年生10月

就学前教育の中で育まれて来た子どもたちの力は、小学校教育につながっています。小学校教育の中で子どもたちが夢中で学び合っている時、そこには就学前教育の中で育まれてきた「人間としての学び合いの力」が発揮されやすい環境や関わりがあります。

【「安心」が「夢中」で学び合う姿を支える】

担任：「昨日、算数で何をしておぼえている？」

はるこ：「画用紙のタテとヨコをくらべた。」

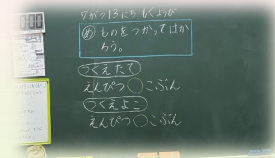
担任：「どうやってくらべたかな？」

ひなた：「折ってくらべた。」

担任：「どうやって折ったかな？」

みんな口々に「なんか、こう」「斜めに」「三角に折った」と手で示したり、折るふりをしたりする中、たろうは無言で席を立ち、前に出て先生が持っている紙を昨日やったように折ってみせた。

担任：「たろうさん、ありがとう。みんな、今、たろうさんがやってくれたみたいにこう折ったら、タテがこれだけヨコよりも長いとわかるね。昨日は、そういうことをやったね。」



子どもにとって、頭と体と心は一体です。頭を働かせようとする時、自然に体(手)が動き、心も動きます。体(手)や心がよく動く時に、頭もよく働いているのです。たろうが席を立ち、実際に折ることで授業に参加しようとした時、その行動を先生が否定せず、みんなの前で認めてくれたことに支えられて、この日のたろうは最後まで夢中で学び合うことができました。

多様な子どものありのままの姿が温かく受け止められ、肯定的に意味づけられることで、教室は安心できる居場所になります。就学前教育の中で丁寧に育まれてきた「学びに向かう力」はこのような「安心感」の中で十分に発揮され、「夢中」で学びに没頭する姿が生まれるのです。

【友達の言葉を自分の考えの中に取り込んで学び合う】

たろうは鉛筆で机のタテ・ヨコの長さを鉛筆で測っていたが、最後に鉛筆半分の長さが残ってしまった。ノートにどう書いてよいかわからず、困ったたろうは席を立って先生のところに聞きにいった。

たろう：「1こ、2こ・・・ってやると、鉛筆が半分残っちゃっう・・・」

担任：「ほんとうだね。みんなに聞いてみようか？」

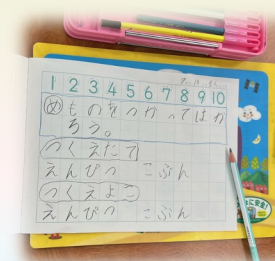
担任：「ねえ、みんな。たろうさんが『鉛筆が半分残っちゃった』って言っているんだけど、そういうのはどう書いたらいいかな？」

けんた：「『何個分と半分でした』って書いたら？」

担任：「けんたさんの言葉聞こえたかな？」

みんな：「何個分と半分」と口々に言う。

担任：「そうだね。『何個分と半分』と書けばいいね。」



わからないときには、先生や友達に聞いて学べばよいと思えること、そうした習慣が身についていること、これも就学前教育の中で大切に育まれてきた子どもたちの「学びに向かう力」です。学ぶことは孤立することではなく、世界・仲間・自分と新たな関係をつくることだからです。

この事例において、たろうからの問いを受けた先生は答えを返すのではなく、その問いをクラスみんなにつなぎ、みんなで学び合えるように授業を展開していきました。学びとは、仲間づくりでもあり、たろうの問いがみんなの問いになるように位置づけたのです。それがきっかけとなり、クラスの学び合いが起きました。たろうも仲間の言葉を聞きながら、自分の考えを新たにつくり直しました。就学前教育の中で育まれてきた「人間としての学び合いの力」は、学びに向かう一人ひとりの多様な姿がこのように教師や仲間とのつながりの中で大切にされた時に十分に発揮されるのです。

学びと育ちを豊かにつなぐシート

時期				
①「	」			
②「	」			
③「	」			
④「	」			

幼稚園・保育園
認定こども園

小学校

【使い方ガイド】 1. ①～④にはご自身が学び合いたいテーマを自由に選んで記入してください。
例：「子どもの姿・活動」「子どもの思い」「子どもの学び方」「子どもの生活」「環境・関わり・配慮」など。 2. 子どもの姿を思い起こしながら、就学前から小学校に向かう過程を書き入れてください。※グループで使用される場合は上記1、2を話し合い、グループの全員が同じテーマを選択し、各自でシートを埋めてみてください。記入後、書かれたものをもとに学び合い、そこでの気づきを加筆して行ってください。

学びと育ちを豊かにつなぐ～「人間としての学び合い」へのまなざし～

国立市幼保小連携推進委員会メンバー

- ・国立市立西保育園/社会福祉法人国立保育会国立保育園/学校法人佐藤学園東立川幼稚園
- ・国立市立国立第二小学校/国立市立国立第四小学校
- ・学校法人白梅学園 白梅学園大学
- ・社会福祉法人くにたち子どもの夢・未来事業団 国立市幼児教育センター
https://yagawa-plus.jp/facility/kodomo_lab/

- ・国立市教育委員会
- ・国立市子ども家庭部

〒186-8501 東京都国立市富士見台2丁目47-1

(表紙写真：社会福祉法人あゆみ会 国立あおいとり保育園)